

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：22701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23792690

研究課題名(和文) 児童虐待発生予防を目指した保健師の個別支援ツールの開発：ネグレクトに焦点をあてて

研究課題名(英文) Development of an assessment tool and guidelines for case management by public health nurses: Focused on preventing and finding neglect in Japan

研究代表者

有本 梓 (Arimoto, Azusa)

横浜市立大学・医学部・准教授

研究者番号：90451765

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、保健師による効果的な児童虐待予防活動とその評価を可能とするため、ネグレクトの予防と発見に焦点をあてた個別支援ツールを開発することを目的とした。特に、保健師が接点を持つ機会が多い、3歳未満の乳幼児を育てる家族への個別支援に焦点をあてた。5名の自治体保健師に対しネグレクトのリスクが高い家庭に対する個別支援に関するフォーカスグループインタビュー調査を行った。国内の児童虐待に関する保健師活動に関する文献検討と海外のネグレクトに関する文献検討を行った。実態調査と文献レビューの結果を統合し、ネグレクトの予防と発見に焦点をあてたリスクアセスメント項目案と個別支援ガイドライン案を開発した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop an assessment tool and guidelines for case management by Public Health Nurses (PHNs), focused on preventing neglect and finding families at high risk for neglect with children less than three years old. First, We conducted a focused group interview (FGI) of five experienced PHNs who worked at a municipality in order to gather their opinions, beliefs, and attitudes about case management for families at high risk for neglect in February 2013. Secondly, We conducted literature review Searched articles published in English from 2008 to March, 2013 using PubMed in April, 2013. We extracted possible items or measurement items using an assessment tool and the methodology of case management and analyzed the items by qualitative methods. Finally, we integrated the results from FGI and literature review. We developed the assessment tool and guideline for case management by PHNs, focused on finding families at high risk for neglect.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：児童虐待 ト アセスメント ネグレクト 個別支援 ツール開発 公衆衛生看護 保健師 ケアマネジメン

1. 研究開始当初の背景

児童虐待の様相は、個々の家族で多様なため、虐待発生予防には、母親・子ども・家族に見合った個別支援が不可欠である。個別支援とは、家庭訪問や面接・電話等の多様な方法を用いて、母親・子ども・家族の多様な健康問題・家族問題・生活問題を特定し、リスクの高い家族に対して、問題に応じた対応と地域のサービス調整を行う支援である¹⁾。

日本では、自治体保健師が、以前から健康診査等の母子保健事業を通じて多様な問題を抱える家族を発見し、最初の支援者として、継続的な個別支援を行ってきた。実際に、自治体保健師の支援事例では、児童相談所に比べ、ネグレクトと3歳未満の乳幼児の割合が高かった⁴⁾。また、多様な問題の特定と個々の家族に応じた支援は難しく、保健師は、児童虐待支援経験の有無や長短によらず、虐待予防事例への個別支援に関する研修と知識・技術を求めている⁵⁾。しかし、個別支援ガイドラインは見られず、多様な虐待事例への個別支援は保健師個人の経験や力量にまかされている。個別支援の記録分析や、支援の評価は行われていない。

研究代表者は、行政保健師を対象に調査を実施し、保健師を中心とした多職種チームによる虐待の予防を目指した個別支援技術を抽出し、支援プロセス評価尺度を開発した。保健師の個別支援は、母子保健事業を通じた早期からの予防的な支援、家庭訪問による個々の家族の生活実態と問題の把握、家族との信頼関係の構築・維持による長期的支援、医療機関との円滑な連携、が特長とわかった。これらの特長的な保健師の個別支援は、ネグレクトのリスクが高い事例への支援で特によく行われていたため、ネグレクトに焦点をあてて個別支援の方法を明確化する必要がある。一方で、プロセス評価に加え、個別支援を受ける家族の変化の評価(アウトカム評価)を行う必要がある。

ネグレクトは個別支援が特に重要な虐待の種類であり、保健師はネグレクトのリスクの高い家族を早期から支援できる立場にある。ネグレクトとは「児童の心身の正常な発達を妨げるような著しい減食又は長時間の放置、保護者以外の同居人による虐待行為の放置、その他の保護者としての監護を著しく怠ること」であり²⁾、親の経済的困難、社会的孤立、被虐待歴、身体・精神疾患等の要因が重複して生じる³⁾。他の種類の虐待と比べ、状況を明らかにしにくく、長期間で進行し、個別性が高い³⁾。ネグレクトは、子どもの発育発達の遅れや不衛生による体調悪化を起こし、乳幼児では生命の危機を及ぼす。そのため、家族の多様な問題に個別支援により対応できれば、ネグレクトの発生と子どもへの悪影響を予防できる可能性がある。海外では、ネグレクトの原因探索やアセスメントツールの開発は行われてきた³⁾が、支援方法に関する研究は少なく、保健師による個別支援に

関する研究は見られない。

これらの問題を解決するためには、児童虐待の発生予防を目指した保健師による個別支援のガイドラインやアセスメントシート、記録用紙等のツールを開発する必要がある。

児童虐待予防には母子保健事業を通じた早期からの発見と継続的な個別支援が欠かせず、特にネグレクトのリスクの高い事例では、保健師が予防的支援を行える立場にあり、実際に行ってきた蓄積がある。しかし、今は体系化された個別支援のツールが存在せず、経験知に基づいた支援がなされており、保健師の支援効果も明確にできていない。よって、本研究は、地域看護学・公衆衛生看護学の学問構築においても不可欠であり、直ちに取り組むべき課題である。

[引用文献]

1) Crosson-Tower C. (2008). Understanding Child Abuse and Neglect Seventh Edition. Pearson Education Inc, Boston.

2) 児童虐待の防止等に関する法律

3) Stevenson O. (2007). Neglected children and their families 2nd Edition. Blackwell Publishing, Ltd. Oxford. 43-70.

4) 有本梓. (2007). 児童虐待に対する保健師活動に関する文献レビュー. 日本地域看護学会誌, 9, 37-45.

5) 中板育美, 牧野忍, 東坂美穂子, 他(2005). 児童虐待予防活動における保健師の自己評価と課題. 子どもの虐待とネグレクト, 7, 24-30.

6) MacMillan, H. L., C. N. Wathen, et al. (2009). Interventions to prevent child maltreatment and associated impairment. The Lancet 373(9659): 250-266.

7) Ueno M, Kayama M, et al. (2004). How public health nurses understand mothers of abused and neglected children The perception of 'Shindosa' in mothers. Japan Journal of Nursing Science, 1, 117-124.

2. 研究の目的

本研究は、保健師の効果的な児童虐待の発生予防活動とその評価を可能とするため、ネグレクトの予防と発見に焦点をあてた保健師の個別支援のガイドラインやアセスメントシート等のツール(以下、個別支援ツール)を開発することを目的とした。

3. 研究の方法

平成23年度は、児童虐待の発生予防を目指した個別支援ツール案の開発を目指し、従来の個別支援の実態に関する調査、国内外の文献レビューと資料分析を行った。では、自治体で児童虐待予防を目指した個別支援に携わっている保健師5名を対象に、フォーカスグループインタビューを行い、ネグレクトのリスクを持つ家庭を発見するための視点と個別支援の方法、研修ニーズを明らか

にした。では、児童虐待予防に関する保健師に対する研修の方法と内容に関する国内文献のレビューから、事例検討会と研修の方法を検討した。さらに、ネグレクトに関する海外文献をレビューし、アセスメント項目と個別支援方法を抽出した。

平成 24 年度は、従来の個別支援の実態に関する調査の分析・公表、国内外の文献レビューを行った。

平成 25 年度は、従来の個別支援の実態に関する調査の分析結果および平成 23・24 年度の研究成果を統合し個別支援ツールの開発を行った。

平成 26 年度は、1)平成 23-25 年度に収集した、早期児童虐待予防に向けた、1 歳 6 か月児の母親における保健センターへの相談の希望と経験に関する調査データの追加分析、2)平成 23-25 年度の研究成果（保健師への調査と国内外の文献検討）から作成した個別支援ツールの見直しおよび成果発表を行った。

4. 研究成果

(1) 従来の個別支援の実態に関する調査

1 市の児童相談を担う機関に勤務する保健師 5 名を対象としたフォーカスグループインタビューから、ネグレクトのリスクを持つ家庭に対する個別支援の方法として、「ネグレクトのリスクを考える」「多問題を整理し、問題の優先順位をつける」「関係機関と共に家庭を見守る」「家族と良好な関係を作り関係を続ける」「親が成長し自立できるように支える」の 5 つのカテゴリーを明らかにした。また、62 の支援内容をコードとして示した。

(2) 1 歳 6 か月児の母親を対象とする調査

1 歳 6 か月児健診対象児の母親 914 名を対象に無記名自記式質問紙調査を行った。保健師の個別支援を受けた経験の実態と経験の有無による母親の特性の差異を検討した。援助要請の枠組みを用いて分析した。

保健センターへの相談希望の有無または相談経験の有無に関連する要因を検討した結果、相談希望の有無に関連する要因は、親性尺度得点、育児による我慢、子どもの人数、母親の就業の有無、子の発育・発達の心配、特性不安・状態不安、ソーシャルサポートであった。相談希望者における相談経験の有無に関連する要因は、親以外の役割得点、育児による我慢、子どもの人数、母親の特性不安、夫からの情動的サポートであった。保健師に対する継続的相談経験の有無に関連する要因は、親以外の役割得点、経済状態、母親の健康状態、児が第 2 子・第 3 子であること、夫または友人からのソーシャルサポートであった。

(3) 児童虐待予防に関する保健師の活動と課題に関する国内文献のレビュー

2006 年 1 月から 2013 年 3 月までに発表さ

れた国内文献(以下、文献とする)を対象に、医学中央雑誌 ver.5 を用いて、2013 年 4 月に検索した。

データベースのシソーラスに基づき、キーワード「児童虐待 and 保健師」「児童虐待 and 地域看護」「児童虐待 and 公衆衛生看護」のいずれかに該当する原著論文を検索した。該当した 60 文献のうち、保健師の活動内容や活動上の課題について記述のある文献 33 本を文献検討の対象とした。

個人・家族への支援は、「対象や支援の場に関わらず共通する普遍的な支援」、妊娠・産褥期の自殺・自殺企図事例への支援などの「特定の対象または場での特徴的な支援」に整理された。グループ支援では、個別支援との連動、グループの類型化が示された。地域・システムに関わる活動は、「地域全体での虐待予防・対応のための連携システムやネットワーク構築」として、育児支援家庭訪問事業の運用、産後うつスクリーニング、周産期医療機関との連携、児童相談所での連携が示された。課題は、個人・家族への支援、地域・システムに関わる活動、専門職としての能力開発における課題に整理された。

(4) ネグレクトに関する海外文献レビュー

ネグレクトのリスクアセスメントに関する海外の文献レビューを行い、母子保健分野で活用可能なネグレクトのリスクアセスメント項目を整理することを目的に行った。

2013 年 4 月、PubMed を用い 2008 年～2013 年 3 月に発表された海外文献から、MeSH “child abuse” and “risk assessment” で検索した。英語の原著論文に限定し、該当した 178 文献から、ネグレクトのリスクアセスメントまたはリスク要因について記述のある文献 15 本を選定した。和文献の検索では条件に該当する文献が見られなかったため、英文献のみを対象とした。対象文献からネグレクトのリスクアセスメント項目となりうる記述を抽出、質的に分析を行い整理した。

児童福祉分野で使用されるネグレクトを含む虐待全般をアセスメントするツールが 12 個見られた。ネグレクトのリスク項目は、子ども、養育者、親子関係、家族を取り巻く環境の側面から整理できた。家事の状況、知識、育児への態度、親子相互作用、近隣との関係などについては尺度が見られた。これらは、母子保健分野における児童虐待に対する保健師の支援内容でも、子の状態・発達確認、育児・家事の知識・技術の具体的指導、養育者の健康・病気に対する助言・指導、近所の状況の把握、家族支援などが挙げられている。また、ネグレクトのリスクを持つ家庭に対する保健師による個別支援でも、家族構成、兄弟、夫婦関係、親の疾患、親子関係、経済状況などを把握していた。しかし経験知からのアセスメントであまり尺度は用いられていないため、ツールとリスクを把握する尺度は日本の母子保健分野においてもより効果的

なアセスメントに役立つと考えられた。

(5) 個別支援ツールの開発

保健師および母親に対する実態調査と国内外の文献レビューの結果を統合し、アセスメント項目とガイドラインの案を作成した。

アセスメント項目は、海外のネグレクトを含む虐待全般をアセスメントするツールを参考に、子ども、養育者、親子関係、家族、近隣や地域の状況、重篤度のドメインで構成した。子どもについては発達、健康状態、行動、養育者については身体的・精神的問題、育児技術・知識、育児行動、育児への態度、親子相互作用、等を含めた。

ガイドラインには、米国・英国のネグレクトに特化したガイドラインを参考に構成し、支援の基礎知識・情報となる、ネグレクトの定義・種類・疫学・影響、ネグレクトの発生とアウトカムに影響を与える要因について示した。さらに、アセスメント項目、支援方法を示した。支援方法には、ネグレクトの多様な要因の情報収集と多問題の整理、関係機関・他職種との協力による子どもを見守る体制作り、コーディネート、親との相談関係の構築・継続・パートナーシップ、家族の生活基盤を整えること、親を支えながら行う具体的な育児指導、などを含めた。親とのパートナーシップ、生活基盤の整備、育児指導などは、保健師が幅広い対象に行っている個別支援の考え方や方法が基盤となると考えられた。さらに、個別支援ツールの見直しを行い、国内外の学会にて発表し、研究者・実践者との意見交換を行った。

本研究の成果の意義は、以下の3点である。

第一に、本邦で初めてネグレクトに焦点をあてて保健師による個別支援を具体的に明らかにした。

第二に、児童虐待予防に向けて個別相談の希望と経験を持つ母親の要因が明らかとなり、母親の体調や生活面での複合的な課題を持つ母親に支援を継続することの重要性が示唆された。

第三に、国内外での動向や知見と実際の保健師の支援状況をふまえて個別支援ツールが開発できた点である。海外の知見も取り入れて、ネグレクトに関する基礎知識・情報を加えつつも、国内で保健師が実施してきた個別支援の実態を加味した点が本個別支援ツールの特徴と考える。

個別支援ツールは、育児支援の観点からも広く活用可能と考えられ、虐待予防と早期発見に資する可能性がある。今後は、本個別支援ツールの活用可能性についてさらに検討を進めていくことが課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

有本梓、岩崎りほ、村嶋幸代、田高悦子：1歳6か月児の母親における保健センターへの相談の希望と経験に関する要因の検討．横浜看護学雑誌，査読有，8(1)：1-8，2015．

佐藤美樹，田高悦子，有本梓：都市部在住の乳幼児を持つ母親の孤独感に関連する要因 - 乳幼児の年齢集団別の検討 - ．日本公衆衛生雑誌，査読有，72(4)：121-129，2014．

岩崎りほ，有本梓，成瀬昂，村嶋幸代：首都圏で幼児を育てる母親の親以外の役割の捉え方 - 就業の有無別の検討 - ．小児保健研究，査読有，72(3)：377-385，2013．

有本梓、岩崎りほ、尾形玲美、田高悦子：ネグレクトのリスクを持つ家庭に対する保健師による個別支援の方法．横浜看護学雑誌，査読有，6(1)：15-22，2013．

尾形玲美，有本梓，村嶋幸代：児童虐待ハイリスク事例に対する個別支援時の行政保健師による保育所保育士との連携内容．日本地域看護学会誌，査読有，14(1)：20-29，2011

〔学会発表〕(計 9 件)

Arimoto A，Tadaka E. Development of assessment tool and guideline for case management by public health nurse: Focused on preventing and finding neglect. (XXth ISPCAN International Congress on Child Abuse and Neglect, Nagoya Congress Center, Aichi, Japan. 2014.9.14-16,)

有本梓，田高悦子：ネグレクトのリスクアセスメントに関する文献レビュー：母子保健分野で活用可能な項目の整理（子どもの虐待防止学会第19回学術集会／信州大学（長野県）2013.12/14）

有本梓，岩崎りほ，村嶋幸代，田高悦子：1歳6か月児の母親における保健師への相談の状況および相談の有無による特徴の比較（第72回日本公衆衛生学会総会／三重県総合文化センター（三重県）2013.10/24）

佐藤美樹，田高悦子，有本梓：都市部在住の乳幼児を持つ母親の孤独感に関連する要因 乳幼児の年齢集団別の検討（第72回日本公衆衛生学会総会／三重県総合文化センター（三重県），2013.10.24）

有本梓，佐藤美樹，中村瑛一，田高悦子，田口（袴田）理恵，臺有桂，今松友紀，塩田藍：都市部におけるセーフコミュニティ推進に向けた基礎的研究 第2報 - 乳幼児の傷害とリスク要因 - （第16回日本地域看護学会学術集会／ホテルクレメント徳島（徳島県），2013.8/4）

5)有本梓, 岩崎りほ, 田高悦子: ネグレクトのリスクを持つ家庭に対する保健師による個別支援 - フォーカスグループインタビューによる質的研究 -, 第1回日本公衆衛生看護学会学術集会, 首都大学東京(東京都), 2013年1月14日

有本梓, 田高悦子: 児童虐待に対する保健師活動に関する文献検討: 活動内容と課題に着目して, 第71回日本公衆衛生学会総会, サンルート国際ホテル山口(山口県), 2012年10月24日

岩崎りほ, 有本梓, 成瀬昂, 永田智子, 村嶋幸代: 母親の不安とソーシャルサポート「親/親以外の役割の捉え方」得点の高低4群比較, 第71回日本公衆衛生学会総会, サンルート国際ホテル山口(山口県), 2012年10月24日

尾形玲美, 有本梓, 岩崎りほ, 村嶋幸代: 3~4か月児の母親の育児に関する自己効力感とソーシャルサポート - 内的作業モデルに基づく比較 -, 第15回日本地域看護学会学術集会, 聖路加看護大学(東京都), 2012年6月23日

岩崎りほ, 有本梓, 尾形玲美, 成瀬昂, 村嶋幸代: 首都圏で幼児を育てる母親の就業の有無と親/親以外の役割の自己認識. 第15回日本地域看護学会学術集会, 聖路加看護大学(東京都), 2012年6月23日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

有本 梓 (ARIMOTO, Azusa)
横浜市立大学・医学部・准教授
研究者番号: 90451765

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし